兵庫・山国（やまくに）・源（げん）ケ坂（がさか）遺跡

1 所在地　兵庫県加東郡社町山国
2 調査期間　一九八六年（昭61）五月～一〇月
3 発掘機関　加東郡教育委員会
4 調査担当者　森下大輔
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　古墳時代中期～室町時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山国・源ケ坂遺跡は、中国自動車道滝野社インターチェンジから国道一七五号線沿いに約二km南下したところに位置している。

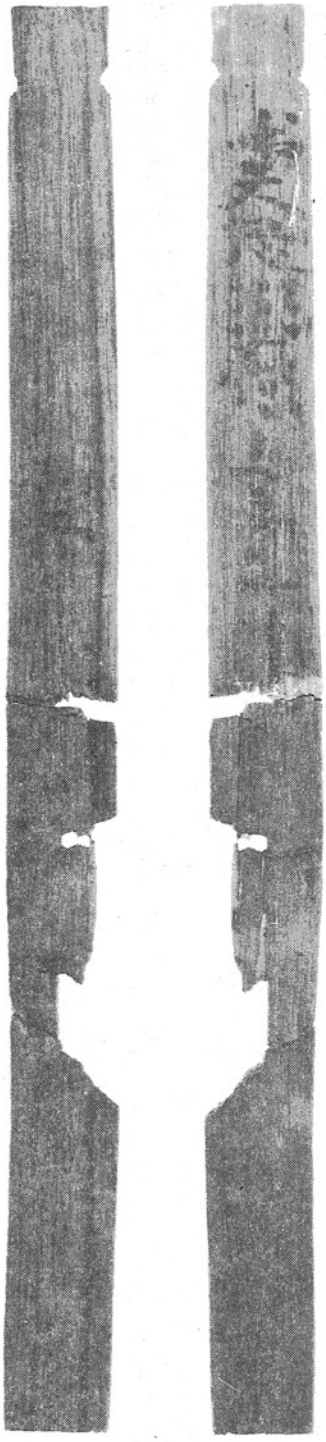
（北　条）

遺跡は加古川によって形成された標高約七〇mの中位段丘面上に立地し、東を比高約二〇mの高位段丘面、西を比高二〇mの低位段丘面によって決定され、北は段丘面を開析してできた小河川（下川）、南は中位段丘面に形成された谷部によって決定されている。遺跡の範囲は、東西二〇〇m、南北一五〇m前後、約三万㎡の規模をもつと考えられる。

谷を隔てて北側には、式内社である佐保神社が鎮座している。当地は元徳二年（一三三〇）には、福田保に属していたことが「播磨清水寺文書」から窺える。

県営圃場整備に先立つ遺跡確認調査によって発見された遺跡で、段丘面の落差などの関係から、設計変更の不可能であった約六〇〇〇㎡を調査した。その結果、竪穴住居一一棟、建物約四〇棟のほか、溝、土坑、井戸などを検出している。時期的には平安時代前半の遺構が検出されていないものの、古墳時代から室町時代に至るほぼ全時期の遺構がみられる。下川の源流となる下藤池からの用水路建設により、この段丘面の利水が可能となった時期に、集落そのものが高位段丘面に移った可能性が考えられ、遺跡としては発展的に消滅したのではないかと考えている。

木簡が出土した地点は、段丘面がわずかに窪む谷部の起点となるところに掘り込まれた東西五・八m、南北五m、深さ五〇cmを測るやや角張った円形の土坑で、断面はU字状を呈している。埋土は大きく二層からなり、木簡は下層のシルトから二点が出土している。共伴遺物には、方形の合板で作った折敷、須恵器の山茶碗・皿・擂鉢・捏鉢、土師器の土堝・羽釜・皿などがわずかにみられる程度である。



8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈咄天正（符籙）三々□□□□」

　　・「〈　　二々　　」　　216×16×2　032

切り込み部分に紐が巻かれていたような痕跡が看取されるところから、二枚一組で使用された可能性が考えられる。また、土坑出土の木製品が木簡と折敷のみであるところから、折敷そのものも呪符に関連したものといえる。木簡はもう一点出土しているが、切り込み部分の断片にすぎず、形状すら把握することはできない。

出土遺物が少く時期を決定することは困難であるが、とりあえず一三〜一四世紀代として幅をもたせておくことにする。

（森下大輔）